

博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名	藍木桂子
学位	博士(保健学)
学位記番号	新大院博(保)甲第29号
学位授与の日付	平成31年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
博士論文名	祖母になった女性の認識についての研究 — 祖母になった年齢と子どもの性別の違いに着目して —
論文審査委員	主査 教授 宮坂道夫 副査 教授 定方美恵子 副査 教授 関奈緒

博士論文の要旨

本研究は、祖母になった年齢および子どもの性別が祖母になった女性の認識に与える影響について明らかにすることを目的として、祖母になった女性を対象として質問紙調査を行い、量的分析および質的分析を行ったものである。量的分析を行ったIにおいては、祖母になった年齢を「59歳以下」と「60歳以上」の二群に、また子どもの性別を、初孫が息子の子である場合(「息子の群」と娘の子である場合(「娘の群」)の二群にそれぞれ分けて統計的に解析した。解析方法は、Mann-Whitney U test, Fisher's exact, Student's t-test, Spearman (rs) 等である。その結果、祖母になった年齢の二群間比較では主要な項目で有意差は認めなかったのに対し、子どもの性別の二群間比較では、日常的な支援量、精神的な支援量、総支援得点平均値、支援への負担感がいずれも娘の群で有意に高かった。息子の群では3つの支援量と負担感とに正の相関があり、娘の群は日常的な支援量のみが負担感と正の相関を示した。子どもとの関係は、息子の群で好転(祖母になる前と後での点数の比較による)傾向があった。こうした結果について、考察では、祖母になった年齢の二群間比較で有意差がみられなかったのは、対象者の年齢のばらつきが少なかったことに原因を求めた。子どもの性別による支援および負担感の違いについて、息子の群での義娘(嫁)の存在、娘の群で生じる一時的な葛藤に起因するものと考えられると論じた。

Iの結果を受けて、IIでは、子どもの性別に焦点を絞り、文章完成法(SCT:sentence completion test)で得たデータを質的統合法を用いて分析した。息子の群から220枚、娘の群から275枚の元ラベルが得られ、それぞれ7つのグループに統合した。考察では、息子の群では、嫁への気遣いから支援を控えたのに対して、娘の群では、母親としての責任を自覚して支援を行ったが、娘の甘えや依存によって負担を感じたものと分析した。さらに、自らの老後について、息子の群では精神的なつながりを、娘の群では娘からのケアを期待していることが示唆された。

以上の考察を総合して、祖母になった女性が自身の生き方に関心を向け、子ども家族への支援のあり方や関係性も含めてどのような祖母になりたいかを考えることができることが必要で、保健医療専

専門職者もそのような視点での関わりを検討することが求められると結論づけた。

審査結果の要旨

1. 保健学（看護学）に貢献しうる研究意義について

高齢化と少子化，晩婚化と晩産化が同時進行する現在の日本社会において，祖父母とりわけ育児初期における祖母による孫育児支援の意義が見直されつつある。くわえて，長寿化や男女共同参画の推進などによって，女性のライフサイクルが変化するなかで，祖母性（grandmotherhood）の持つ意味も変容しているとされる。こうしたなかで，祖母となった女性を対象とした実証研究の必要性が高まっているが，保健学・看護学分野のみならず，医学や社会科学などの関連領域においてもそのような研究がきわめて少ない状況が続いている。その一因は，「祖母となった女性」を対象として研究を行うことの困難さがあることにくわえて，祖母性という概念の複雑さ，および，本人の祖母性についての認識に影響する可能性のある因子が非常に多岐にわたることなどから，研究を立案することが必ずしも容易ではないことが指摘できる。そうした中で，祖母になった年齢と子どもの性別という二つの因子に限定することで，この複雑な課題に取り組もうとした本研究は，学術的にも社会的にも十分な意義を有するものと評価できる。

2. 論文の構成と内容についての審査について

本論文は，緒言，祖母を対象とした海外の研究動向，祖母を対象としたわが国の研究動向，祖母になった女性の年齢による影響，祖母になった女性の子どもの性別による影響から構成される最初の部分で，本研究の背景についての文献学的考察が論述されている。それを踏まえて，研究目的と研究の意義が示され，研究方法において，Ⅰ（量的分析）とⅡ（質的分析）の方法が示されている。その後の部分はⅠとⅡに区分され，それぞれについて，結果，考察，限界と課題，結論が述べられ，最後にⅠとⅡを総合した簡潔な考察を含む結語が掲げられている。以下に，本論文の構成に沿って，審査委員の評価を述べていく。

まず，緒言から研究目的の設定までの部分については，100件以上に及ぶ多数の文献を丁寧に検討していること，および，先行研究の動向から研究目的の設定にいたるまでの問題意識は的確なもので，学術的な意義も認められるものとして，審査員全員が高く評価した。ただし，複雑な影響因子が考えられるテーマであるために，祖母になった年齢と子どもの性別に限定することの意味について，さらに論じるべきではないかとの指摘もあった。

結果から結論までの部分については，結果Ⅰについては，性差に関する記載と考察Ⅰでの記載が一致していない箇所があるとの指摘があった。また，結論Ⅰについて，「嫁の存在」や「一時的な葛藤」を述べているが，これらはⅠの結果に基づくものとは言いがたく，Ⅱの結果から導かれる内容ではないかとの指摘があった。さらに，結果Ⅱについて，SCTの分析過程について，刺激文の設定の妥当性や，分析過程についての信頼性の確保についての指摘があった。これらの指摘事項に対して，申請者は論理的かつ明確に応答し，その対応について審査員全員が十分に妥当なものであると評価した。

3. 総括

以上のように，審査の中で，本論文の本質的な価値を疑うような疑義は提示されず，具体的な指摘事項に対する申請者の対応も十分なものと思われた。本研究成果は祖母となる女性の健康支援にも資するところの大きい貴重な基礎資料であり，社会的な波及効果も期待できることから，学術的にも社

会的にも価値を有するものと評価した。

以上より，論文審査委員3名の総意として，本論文は学位規則第4条第1項に定める博士（保健学）の学位を授与するに値する水準に達していると判定した。